

必然性のないライナーノーツ

Metaphone

2013年が幕を開け、また今年もダンスミュージックのシーンにおいては期待されるべき数々のリリースが控えている状況となっているが、ここではその中でも特に期待が大きいであろう作品の1枚として、Nonplus レーベルが2月にリリースを予定しているコンピレーション作品 "Think and Change" を挙げてみたい。FACT Magazine が、2013年に注目すべきレーベルの一つとして定位しているこのレーベルが発表するこの作品は、既に発表されているトラックリストを参照しても、参加アーティストとして Boddika & Joy Orbison のコンビを筆頭として、更に各人のソロ名義、Lowtec、Four Tet、Pearson Sound、Kassem Mosse、Scuba のエイリアスである SCB、Basic Soul Unit といった、順当性と意外性がバランスよく取り混ぜられた構成を読み取ることは容易であろう。Instra:Mental としても活動する Boddika と Jon Convex によって2009年に設立された Nonplus のリリースを順序良く追ってみると、Instra:Mental が dBridge と共に提唱している "Autonomic" のサウンドデザインを体現させつつ次第に変異し——**ドラムンベース**を嚆矢として次第にダブステップ、テクノを経て、途中で Jimmy Edgar によるエレクトロファンクや Actress が産み出すわけのわからないサウンドスケープなどをアクセントとしながら——、ベース・ミュージックのうねりの中で最終的にハウスミュージックへと着地するその遷移を筆者は勝手に見出ししてしまうのだが、まさにその結節点として形作られているであろう "Think and Change" がどのような音世界を我々に見せつけてくれるのか、興味と期待が尽きることは無い。

さて、仮にもライナーノーツの体裁をとっている本稿が、唐突に一見すると無関係な作品への言及から始まった無礼をお詫びしつつ、既に皆様の手元にあるであろう "BEYOND THE DEAD FUTURE RE-EDIT" に

ついて触れてみたい。オリジナル盤である "BEYOND THE DEAD FUTURE" は、SLAKE こと藤井岳彦が音楽ゲーム制作の一線から退いた後の2004年に自主制作盤として密かにリリースされたコレクションアルバムとなっているが、この盤において集約された楽曲とは、SLAKE が音楽ゲーム制作に介入する以前、ドラムンベースのDJとしてのキャリアを築いていた時代に制作、および発表された曲群である。これらの楽曲は年代としては1990年代の後半、およそ日本国内においてドラムンベースというシーンが定着するかしないかの時期に、アナログ盤、ないしはコンピレーション作品への提供楽曲といった形でリリースされ（なお、当時のリリース情報やゲーム音楽向けに制作された一連の楽曲については CYBER TRACKER SLAKE <<http://www.geocities.co.jp/Playtown-Spade/1520/slake.htm>>のページに詳しい）、それらの当時既に入手困難となっていた音源が1枚の手焼きと思しきCDにコンパイルされた "BEYOND THE DEAD FUTURE" を幸いにして筆者も入手することができた。

筆者も SLAKE というアーティストの存在を音楽ゲームを契機に知った人間の一人であるが、筆者が初めてその音に触れたのは、いわゆるゲーム音楽において SLAKE のデビュー作とされているビッグビート "GAMBOL" ではなく、ドラムンベースの "SODA" であった。当時まだ筆者はいわゆるクラブミュージックの熱心なリスナーではなく、音楽ジャンルについても音楽ゲーム側が提示する情報ないし世界観のみを頼りとし、鵜呑みにして何となく把握しているという状況であったが、その流れにおいて「ドラムンベース」というタームを自分勝手に咀嚼しつつあった中で、"SODA" という楽曲が耳に届いた時のインパクトは未だに忘れることができない。音楽ゲームにおけるあらゆる情報が横並びとなっており、現在のようにアーティストや名義を軸と

して楽曲を把握するという習慣がまだ定着していなかった状況で、筆者は "SODA" という楽曲に触れたことをきっかけとして、初めてこれらのゲーム音楽を誰が作っているのかを意識し始めたと言っても決して過言ではない。以降、SLAKE はドラムンベースというジャンルに縛られることなく様々なバリエーションの楽曲を音楽ゲームのために制作してゆくことになるが、その活動を経た末の一つの節目と思われるタイミングでリリースされた "BEYOND THE DEAD FUTURE" を耳にし、"SODA" を初めて耳にした時の衝撃を思い出せば、「戻ってきた」印象を強く持ったものである。

"BEYOND THE DEAD FUTURE" のリリース以降、SLAKE としての音楽活動は、表立ったものについては非常にマイペースと形容されるべき頻度で我々の前に現れては話題を振りまいてきたが、2011年末より *nouvo nude* が主宰する FLASH CUBE レーベルにおいてその活動はより活発化した印象がある。ここにおいて SLAKE 名義としては初めてのオリジナルアルバムである "THE INVISIBLE FORCE" がリリースされたが、その内容に触れた筆者が抱いた第一印象は「意外」というものであった。以前より、筆者は勝手に SLAKE というアーティストの音楽的ルーツを UK にあるものとしてそれぞれの楽曲を読み取っていたが、このアルバムで展開されていたのはまさに米国が主導し現在進行形でムーブメントを巻き起こしている EDM を意識したと思われる作風であり、勝手に文脈を見出した気になっていた筆者はまさに面食らったものである。もちろん、これはあくまでもアルバム作品全体の総合的な雰囲気から汲み取った結果であり、各曲から垣間見える細やかなサウンドメイキングの妙や意外性に富んだ展開は、まさに SLAKE というアーティストの作品であることを雄弁に物語っていたことは付記しておきたい。

そして2012年末のタイミングにおいて、SLAKE が独自に楽曲を世に問うためのチャンネルとして新たに "ALONE TOGETHER RECORDINGS" が立ち上がり、その第一弾リリースとして "BEYOND THE DEAD FUTURE" を再リリースするというプランが選択された。当初は再リリースの文字通り、"BEYOND

THE DEAD FUTURE" を音源はそのままにリマスタリングのみを経てリリースするという案もあったものの、当時の音源を改めてチェックした SLAKE 本人によって、現在の音楽シーンの情勢を鑑みてこのままの音での再リリースは非常に苦しいという判断が下され、収録楽曲の見直しとボーナストラックの追加、そして最も重要な要因として全収録曲に RE-EDIT を施した形でリリースが決定したのである。その成果については既に皆様の耳に届いているものと思われるため、いちいちこの場で言語化する野暮は慎みたいと思うが、エクスクルーシヴ楽曲とボーナストラック——いずれのリミックス曲についても、今作では SLAKE が発露することの無いエレクトロへの目配せが各リミキサーの視点に基づいて補強され、非常に意義深いものとなっている——を除いては全てが純度100%のドラムンベースで占められたアルバムが2012年末にリリースされるということの意味を、筆者としては2004年に感じたものと同種の、まさに再び「帰ってきた」喜びとして受け止めずにはいられないのである……。

ALONE TOGETHER RECORDINGS の今後の展望については、部外者である筆者としてはもちろん知る由も無く、また SLAKE 本人としても次の一手についてのアイデアは抱いているものの、具体的な方針については模索中である旨を公言している。過去に筆者を含む一部のリスナー達は、"BEYOND THE DEAD FUTURE" のリリースと時を同じくして SLAKE が Napalm と組み "Magic Gang" なるユニットを結成し、その後特に何も起こらなかったという時系列を身を以て体験している。その経験を踏まえると今後何が起きても、何も起こらなくても動じまいという姿勢で動向を見守りたいと筆者は考えるものの、誰もが容易にクリエイターと化すことができ、一歩間違えば Vaporwave のように無茶苦茶なシーンが容易に形成されてしまうこのご時世に、ゲーム音楽とも現行のクラブミュージックシーンとも一定の距離をおいた立場にある SLAKE というアーティストがどのような音世界を我々に見せつけてくれるのか、興味と期待が尽きることは無いのは果たして筆者だけであろうか？

(2013.1.30)